

「探究活動支援入試」新設

崇城大

来春入学予定者を対象に九州の大学が新たに導入する入試制度の中でもユニークなのが、崇城大（熊本市）が創設した「探究活動支援入試」だ。高校時代の課題研究や探究活動を評価することにより、大学でさらに研究を究めたいという意欲ある学生を獲得するの狙いだ。

工学部や生物生命学部など理系を中心に5学部を擁する崇城大は2021年12月、熊本県内のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）5校と高大連携・高大接続に関する協定を締結し、大学の教員が対面やオンラインで高校

生の研究活動を支援。高校生は、大学教員による指導を受け、大学の施設を使えるからこそ可能な研究に取り組んでいる。

新設した探究活動支援入試には①探究活動プロセス選抜②探究活動アピール選抜——の二つがあり、①は崇城大の教員から研究支援を受けた高校生が対象。合格すれば1年生から研究室に配属されるのが特徴で、高校時代の研究を続けたり、さらに発展させて新たな研究に取り組んだりできる。

②は崇城大の教員から支援を受けたかどうかに関係なく、高校時代に課題

研究や探究活動に取り組んだ全国の受験生が対象で、①と異なり併願も可能だ。②とも、活動実績報告書などを提出してエントリー（1次選考）し、研究成果発表などの2次選考で合否を判定する。募集人数は各学科若干名で、エントリー期間は9月5〜12日。

21年春まで県内のSSHの1校で校長をしていた崇城大の山本朝昭・入試広報部長は従来の高大接続の課題について「高校と大学が入試のところで分断されており、高校側からすると生徒が大学でどう成長したのかが見えにくかった」と説明。県内の高大連携の取り組みや新たな入試制度の導入により「高校から大学までシームレス（継ぎ目のない）な7年間の学びを提供すること、結果的にハイレベルな理数系人材を育成したい」と語る。

